（原著論文）　研究紀要第 68 号

小学校における英語教育

~子どもの特性を生かした英語学習の実現を目指して~

藤井昭洋[1]　佃沙央理[2]

Teaching English at Elementary Schools

~ To Teach English Considering Students' Characteristics ~

Akihiro Fujii and Saori Tsukuda

要約

子どもは、音声を暗示的に聞き取るということに優れた能力を持っている。小学校で英語を外国語として教える際には、そういう子どもたちの言語習得のルールに沿って教えることが求められるのである。したがって、教師は授業の中で、十分な音声インプットの蓄積がなされるような価値のあるインプットを与えなくてはならない。小学校英語の詳しい授業案を考える前に、まず我々は、言語がどうやって習得され、どのように使われるかという点を知る必要があろう。さらに、新しい学習指導要領の改訂に伴い、小学校５・６年生への適切な文字指導を行なうことが求められる。文字指導は単なる書き写し練習ではなく、十分な音声インプットが行われたあとに続く重要な学習活動であることを忘れてはいけない。

キーワード：小学校英語、外国語活動、音声インプット、使用場面、文字指導

Abstract

Children have an ability to acquire any language's sound system implicitly through meaningful input. Teaching English as a foreign language in elementary school should therefore be conducted according to this ability of children to acquire the English language's sound system. To obtain enough sound input, teachers should focus on meaningful input in their classes. Before considering the details for lesson plans for elementary school students, teachers need to know how language is acquired and used. With the start of the new course of study, consideration must now be given to appropriate instruction in teaching the alphabet and writing activities for the fifth and sixth graders. Instruction in writing must not be simplistic copying and practicing the letters of the alphabet but must follow students being given sufficient phonemic input.

Key words: Teaching English at elementary schools,　Foreign language activities, Sound input,　Meaningful context,　Teaching alphabet

---

受理年月日：2019 年 7 月 31 日　1：高松大学非常勤講師　2：東京学芸大学大学院生

はじめに

学習指導要領の改訂により、次期課程では、小学校外国語活動が 3・4 年生において、年間 35 時間、「外国語活動」の授業が行われることになり、5・6 年生では、年間 70 時間の，教科書を使う正式の教科の「外国語科」となる。今回の改訂では、聞くこと、読むこと、話すこと(やり取り)、話すこと（発表)、書くことの 5 つの領域となったことと、それぞれの領域に目標が定められていることが大きな特徴である。特に書くことの領域が加わったことが，大きな変化であろう。この書くことの目標には、大文字、小文字を活字体で書くことができるようにすることや、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を書き写すことができるといった項目などが含まれている。

アレン玉井（2014）によると、小文字の獲得は、大文字の 3 倍の時間がかかると言われており，単語のスペルが理解できる力には小文字の認識能力が強く関係していることから、小学校での文字指導は、大文字も小文字もともに時間をかけて確実に指導することが求められることになる。教師は、小学生が自分の力だけで英文を書くことができる力を求められていないことを十分に理解し、教師が経験としてもっている単語練習やペンマンシップなどの座学形式を施さないようにするなど，留意が必要であろう。母語の場合，文字を通してアウトプットするまでに長い蓄積があったように、小学生にすぐさまアルファベットの定着をはかろうと，小テストなどを通して訓練するのではなく、長い期間をかけて文字に親しませるなど，余裕をもって取り組んでいくことが求められよう。本研究では、アルファベットを実際に書き始めるまでの文字遊びに焦点をあて、子どもの学びに寄り添う活動を提案したい。

これからの小学校 3・4 年からの外国語活動を運営してく上で，小学生の認知活動と言語習得の理論に沿った授業展開が重要な骨組みとなろう。まず，ことば（言語）がもっている意味を知り、ことばが使えるという状況を理解することで、教室内に実際の言語活動の場面をもちこむことが大切である。意味を伴わない言語活動での練習は，子供銀行のお金に似て現実世界で流通することはないように、実際の言語使用場面で使えることはない。言語習得の順序に従って、膨大な量の正確な full sentence のインプットを学習初期に行うことは、これから始まる 10 年に及ぶ英語学習の中で最も重要な基盤となることを忘れてはいけない。英語らしい音を体に叩きこむことができる期間は、小学校時に限られている。

学習者一人一人の，今後の英語学習を支える骨格作りとして小学校英語への期待は大きい。次期指導要領では、小学校 5・6 年生に文字指導を導入することへの簡潔な提案が行なわれている。もちろん，中学校でよく目にする，単語を何度も何度も書かせて練習するといった方法が小学校に降りてくることが文字指導ではない。文字を書く時も、ことばの意味を失ってはいけないのである。小学校での文字導入は、そこに至るまでの音の積み上げと、意味のある言語使用場面に関連した文字指導があるはずであろう。

1. ことばの核とは何か

日本人の中学生の場合，主語や動詞といった記号の操作を知った後で英語教育が始まって行くのに対し，小学生の場合，使いながら身につけていくという点では，大きく異なっている。小学生は、音を聞き取るのがうまく、耳から入ってきたものがそのまま口から出て、それがコミュニケーションの道具として使われると言ってもよく、この一連の流れを小学生を対象とする授業では知っておかなければいけない。

私たちは言葉を使いたい時，まずそこには伝えたい思いがある。粕谷（2012）は、ことばがもっている本来の姿を図１のように定義している。これによれば，ことばが使われる時には、心の動きや思い（「意味」）が核にあり、それを伝えるために「音声」があり、それを残したいときに「文字」が使用される。したがって、ことばを使いながら身につけていく小学生の特性を考えた時、教師は、そういうことばの世界をまず考えておく必要がある。

ここで、小学校の外国語活動でよく見られる単語の定着を意図したキーワードゲームやビンゴゲームはどんな意味があるのか考えてみる。教師の発声した colors の音声を聞き取って、生徒が縦や横や斜めに線をつなげようとすることは、ことばのもっとも大切な意味を伴わないまま、音声の練習を行っている例と言えるのではなかろうか。話者が green だと伝えたいときは，どんな場面の場合か、pink や red ではなくて green が持っていることばの世界はどんなものかを考慮した、思い（意味）と音（音声）がリンクした活動を考える必要があるといえよう。このタイプのビンゴゲームは、おそらく使用する単語を colors から animals、numbers、verbs に変えて行なわれていくのだろうが、このようなことばの本来の姿とはかけ離れた練習をしても小学生は使えるようにはならないのではなかろうか。私たちは、”Be quiet!”という英語表現をビンゴゲームで親しんだり、リピート練習をしたりして身につけただろうか。そんなことをしなくても、およそ使う場面を間違わずに使用できるのはなぜだろうか。その理由は，ことばの核を伴わない、音声だけの練習をしたのではなく、使用場面と意味が一致している場面に親しんでいるからである。場面と音声が一致しているとき、子どもは自然とことばを身につけていく。改めて、ことばは意味を伴うものだと認識しておきたい。これを図示したものが図１である。ことばには中心に核となる意味があり、その周りに音声や文字が広がっていることを忘れてはいけない。

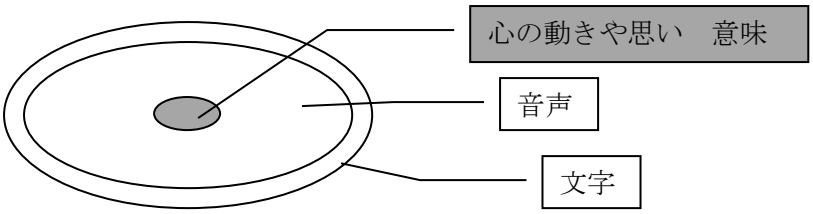

図１　ことばの在り様　（粕谷，2012）

2. ことばが使えるとは，どういうことか

我々は日常生活において日本語という音声言語を使って生活しているが，その音声言語が機能しない場合も起こりうる。次の 3 例は，音声によるコミュニケーションがなりたたない可能性のある場合である。そこには音声言語が機能するということはどういうことかが，示唆されている。

まず，青森県出身の A さんと東京出身の B さんがことばを使う時を想定してみる。B さんはなじみのない A さんの方言のため，A さんの言いたいことが分からない。つまり，この時ことばは機能していない。伝えたいことを「音声」に乗せても、機能しないのは「音声」に原因があるという例である。また、服飾関係で働く人たちの会話を鉄道関係に働く人が聞いても，おおむね理解できないのは，そこに使われている「語彙」になじみがないからである。また、私たちが使う日本語において助詞を誤って使用した場合、伝えたい意味とは異なる情報が相手に届いてしまう。これは,「文法」が無視できないという例である。

このように，音声言語が機能するということは、この 3 つのカテゴリー（音声・語彙・文法）を網羅しているという条件のもとではじめて可能となる。さらに，この 3 つのカテゴリーの関係性について見ていくと、語彙も文法も音声を伴って、生まれていくことが分かる。音声言語が人に使ってもらうためには、すべては初めに音声に頼るのである。粕谷は、この状態を図２のようし示し、音声に語彙と文法が宿って初めて音声言語が使えるということを図示している。

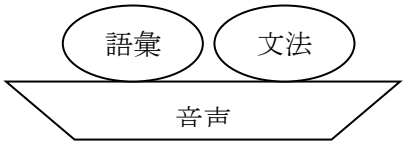

図２　　音声言語に必要な３要素の関係性（粕谷，2017）

2.1　ことばの性質

これまでみてきたように、ことばは音声を介して生まれ、伝えたい意味を届ける機能を持っている。世界には文字のない言語が多くあるように，やはり音声のもつ重要性は無視できない。ことばの性質をみても、私たちが母語を獲得していく上でも、音声の認識→受信→発信という順番は変えようがない。

次に示した図 3 は学習の流れにそって獲得していくスキル順を表している。この 4 つのひし形はそれぞれが完全に独立しているのではなく、十分な listening の蓄積がじわりじわりと speaking と reading に染み出していくような関係にある。したがって、小学校 3・4 年生では膨大な量の listening の地盤工事を行っている意識で、音を入れていく作業に重点を置かなければいけない。つまり次の speaking や reading、writing につないでいく骨組みを作っている作業である。

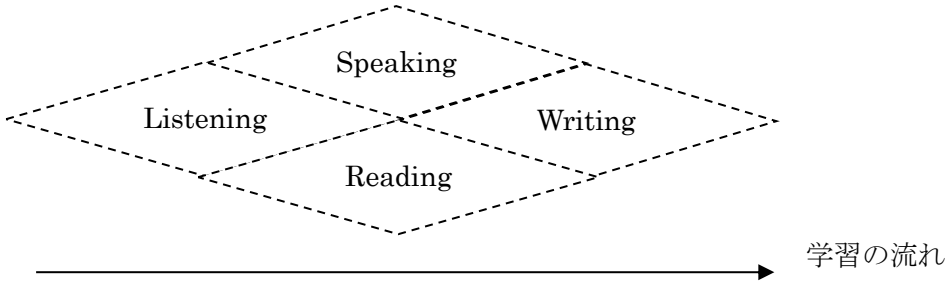

図 3　スキルの獲得順（粕谷，2017）

中学校では、4 技能を 25 パーセントずつ教えていくことが一般的だが、そのため学習者のアウトプットに無理が生じることも多い。小学校 3・4 年生では図 4 のように授業のほとんどが listening の十分な蓄積（音貯金）を目指し、耳から入ってくる情報が、まず音とリンクし、さらには文字とリンクするのを待つしかないのである。

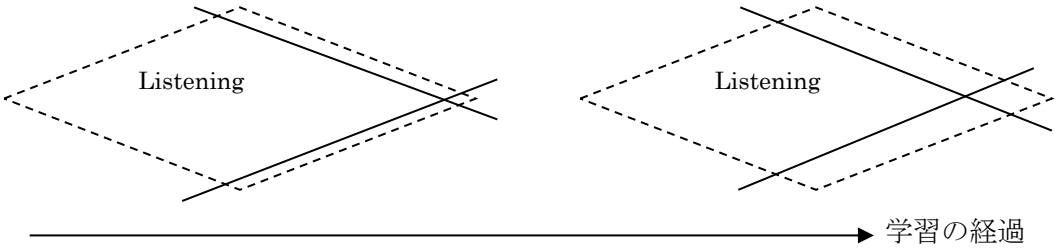

図 4　　学習経過によって変化する 4 技能の割合（粕谷，2017）

2.2　音の積み立て

音を導入しようとするとき、体に入って行くのは音だけではない。音を聞かせると必ず、意味や文法が伝わってしまう。これは図 2 で示した通りである。これに加えて、ことばらしい音の流れ（prosody）も伝わってしまう。したがって、教師は学習者に聞かせる際、聞く価値がある音のつながりを聞かせること（意味）、英語らしい音であること（prosody）、文法を伝えるつもりであることのすべてを満たすものを発信することが大切になってくる。文法を伝える必要上、発信する文は full sentence であることが重要となり、コンマやピリオド 、冠詞を音に乗せたプロソディが満たされている full sentence を聞いて、学習者たちは、適切な文の十分な音の蓄積を可能にすることになる。

これらの目的を満たすための初歩的な活動として挙げられるのは、英語歌やチャンツである。英語歌は、英語らしいリズムを学習者の中に深く浸透させていく目的がある。ストレスがどこかを叩き込む作業といっても良い。その時間に教えようとする目標表現，つまりコアターゲットとなる表現を含んでいるか、チャンクになることばの区切りを意識させるものであるか、アクションを伴うときは、内容語にストレスがあることに関連しているか，といった条件がそろうものが薦められる。

チャンツは, Carolyn Graham (1986)のジャズチャンツ(Jazz Chants for Children)の完成度が非常に高い。冠詞が入っているもの、韻を踏んでいるものなど、母語話者が作った信頼度の高い教材の利用が推奨される。また、十分な音の積み立てができると、学習者たちは自然とアウトプットするようになるので、学習者の口から自然と出てくるまで，教授者は何も言わないことが大切である。この時、ゲル状の音でアウトプットする学習者が時々出てくるがこれを直さないことも重要だろう。たとえば，♪This Old Manという英語歌の中には、”give a dog and a bone”という歌詞があり、これをギバギバボンやベロベロベなど、はっきりしない音（ゲル状の音）でアウトプットする時があるが、その場合でも決してこれを直そうとしないことが重要である。耳から入ってきた音が自分の出力とリンクする速さは人それぞれである。

カルタやカードゲーム（神経衰弱や仲間探し）などで音を入れようとすることもあると思う。図５は、図１のことばの在り様の音声部分だけがある状態を表している。カルタやカードゲームは、おそらく図５の状態で、ことばの核のない練習だといえる。実際の使用場面がない音声の練習は、使えない英語の練習をしていることと同じであろう。

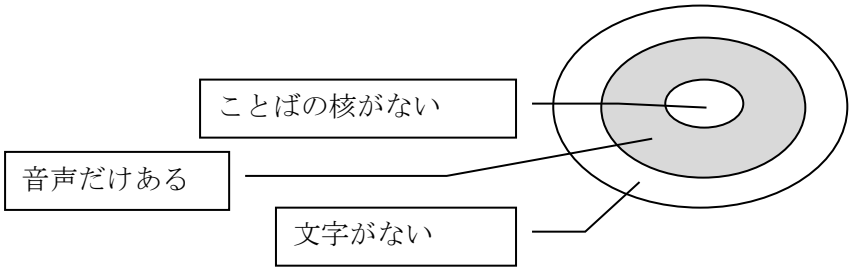

図５　　ことばの核を失った音声練習（粕谷，2017）

3.　文字の指導

文字指導に入っていくタイミングは，音の蓄積が十分されてからである。Cat という音を聞いてネコの絵が浮かぶ状態が音と意味がつながった状態なら、cat と書かれているものを見て cat という音声が分かり、ネコが浮かぶ状態が文字と音と意味がつながった状態である。初めから，書くことを想定するのではなく，まず、アルファベットの文字の形と音を理解するように，活動を組み立てていく必要がある。この目的を満たす活動として一般的なのはフォニックスであるが、ただその導入時期や指導法については，指導者の意見が分かれるところである。

フォニックスは元々、音の蓄積がたっぷりある英語を母語とする話者の理解を助けるために作られたシステムであることや、フォニックスルールの単語カヴァー率が低いということを考慮すると，安易に取り入れることには注意が必要である。日本人学習者には、まず文字遊びを通して、アルファベットへの親しみを増やし、アルファベット順に慣れ親し

むことを優先することで、これまでの音の蓄積と関連させる必要があると思える。フォニックスで学ぶというよりも、与えられたインプットを学習者が自学していく autonomy の作用を期待したいものである。

3.1　文字遊びのいくつか

アルファベットの文字の形と音を理解するための活動は，じっくりと時間をかけて行うことが推奨される。これは，文字に対する学習者間の定着差が大きくなることを防ぐとともに，定着に時間のかかる slow learners への配慮とも絡んでくる。周囲との定着の差が明らかになる活動は，学習者自身の学びの到達を理解する機会にはなろう。しかし，定着に個人差がでると予測される初期文字指導においては，あまり好ましいことではない。定着に時間を要する学習者が，「自分はみんなより遅かった。」や「今日もできなかった。」という感想・経験を積み上げてしまっては，今後 6 年間の英語学習に対するモチベーションに大きく影響することとなる。早急な文字指導に入るのではなく，文字遊びを通して時間を十分かけることが期待されるのである。

学習者間の差が生まれにくい活動は，個人活動がある。この活動の利点は，他人との比較が少ないことから，他の人と比べたときの不安や心配を排除でき，学習に集中できる環境をつくり出すことである。したがって，初期の文字遊びは，個人→ペア→集団と活動人数の少ないものから多いものへ移行することが望ましい。以下は，授業で扱いやすい活動例のいくつかである。

〈個人活動〉

- Dot-To-Dot activity（アルファベット順に線でつないでいくと絵ができあがる活動）
- カードを使って，大文字と小文字の似ているものをセットにする活動
- リピート練習（教師の発音のあと，学習者がくりかえす活動。ただし，単なるリピート練習になることを避け，思考を取り入れた練習にすること。例えば，アルファベットの形がカーブしているときだけリピートするや，アルファベットの形が第 3 線より下にあるものだけリピートするなど思考の必要な課題にする）
- 一人カルタ（教師の発音のあと，該当するアルファベットカードを選ぶ活動。片づけ時には，アルファベット順にさせる習慣をつけることで順番を意識させる）
- Seventh card（アルファベット順の 7 枚のカードを使い，無作為に並べたカードがアルファベット順になるかを探る活動）

〈ペア活動〉

- A-er（二人でアルファベット 26 文字を分け，それぞれが好きなカードを一枚出して，A に近い方がカードを獲得できるゲーム）

・ ペアの片方が大文字を出し，相手方は大文字とセットになる小文字を見つける活動

〈集団活動〉

・ ABC ソングを使って(スタート位置を変えながら，逆からや横から歌うなど歌うスタート地点を変える） 図６参照
・ ABC ソングを別の歌にのせて（例えば「桃太郎さん」にのせて歌う）
・ 略語を探そう（CD/YKK/DVD などを見つけさせる）
・ 大文字・小文字の形に注目させる（かわいいのはどれ，コップにするとたくさん飲めるのはどれ？など，形に注目させるような質問を行う）

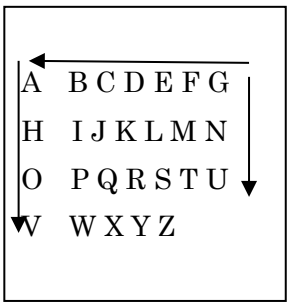

図６　歌い始めの変化

3.2　文字指導の留意点

文字遊びでアルファベットの形と文字に慣れ親しんだ後に，実際に書く活動に入っていくことになろう。書く活動に入ったとたん，漢字ドリルのような訓練が待っているのではない。図１のことばの在り様にあったことばの核を伴う活動が，引き続き求められる。伝えたい思いを，音声で伝えるか，文字で伝えるか，場面による使用方法の違いを感じさせるような意味のある言語使用が求められるのである。

図７は，文字写しの例である。5 種類の感情表現が示されているが，全ての表現を書いて練習するのではない。学習者の今の気持ちにあった表現だけにフォーカスし，その表現をなぞり，書いていく活動である。いきなり文字を写していく作業は大人が考えるより，子どもにとっては非常に困難な作業である。時間をかけてじっくりと取り組めるよう，指でなぞってみたり，なぞるペンの色を変えたりして，アルファベットの形に親しむことが望まれる。文をなぞることで，語と語の間に少し空間ができることや，文の始まりが大文字であることなど，なぞり書きを通してゆっくりと学習者自身が発見していけるようなサポートが望ましい。文字の定着には個人差があることから，個に寄り添った対応が求められるのである。

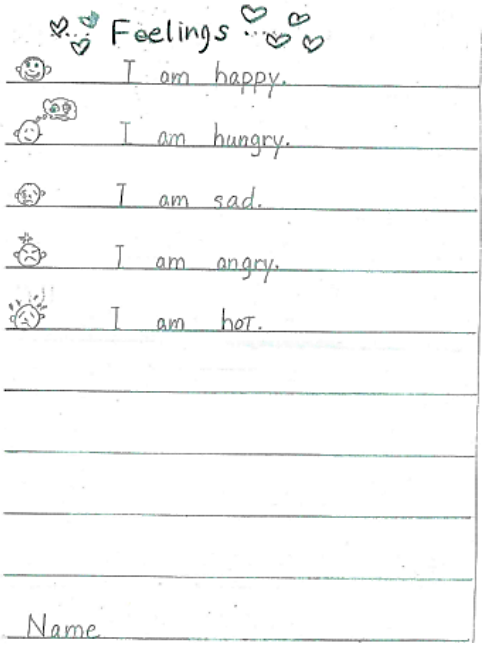

図７　文字写し(粕谷，2017)

文字指導が訓練化しないよう注意し，文字はことばの核を伝える道具であると学習者に認識させるために，文とともに絵を書かせることも，大きな支援となる。特に初期の文字指導においては，文字と意味をつなぐ工夫が必要である。さらに，その他の留意点

としてあげられることは，必要以上の添削や書きなおしなどの指導は積極的に行うべきではないということである。母語話者がはじめて文字を書く時に発生するであろう誤り（かがみ文字や大きさの不均等性など）は成長とともに徐々に消失していくことを考慮しつつ，教師はおおらかな姿勢で文字指導（文字写し活動）を行うことが重要である。

おわりに

小学校での外国語活動と，教科としての英語科を合わせた 4 年間の学習は，子どもの学び方に寄り添ったものであるべきであろう。子どもの学び方の特性は２つに分類できる。一つは，ことばを使いながら身につけていく特性と耳から入ってきた音を上手に口から出せるという特性である。さらに，言語を機能的に学習できる中学生以上の学習者とは異なり，小学生は言語を使いながら身につけていくことができるという特性もある。使いながら身につけていくということは，ことばには使われるべき場面があり，ことばで伝えたい思いがあるということである。教師は，授業中に繰り広げられる英語を使った表現が，ことばの核を伴っているかどうか考慮しなくてはならない。また，耳から入ってきた音を再生できる子どもたちにとっては，授業中の英語が，正しい音で，英語らしいリズムであることが大切である。

ことばは，いったん獲得されてしまうと，それらを剥がすためには時間と困難が必要となる。小学校時代に，どんな英語に触れさせたかで，のちの中学，高校での学習内容は必然的に変わってくる。中学校で，小学校時に身についた英語を剥がしていたのでは，中学，高等学校での充実にもつながらない。それだけに，よくも悪くもどんな音でも再生できる子どもの特性を，十分知るべきであろう。これらの特性を踏まえて，ことばの獲得順序にそった無理のない目標設定を期待したい。ことばは，受信してから発信されるという前提を知り，はじめから安易に発信を目標とした授業作りではなく，十分な音声インプットを聞かせることが，小学校での英語学習ではとりわけ重要であることを知るべきであろう。

注

粕谷恭子(2017)　平成 29 年度東京学芸大学公開講座　資料

引用文献

粕谷恭子(2012)「子どもにうれしい，担任も楽しい外国語活動」『北海道大学外国語活動研究紀要』5，9-14

参考文献

『英語教育』6 月号（2017）大修館

NHK エデュケーショナル(2017)『プレキソ英語 そのまま使える小学校英語教材』NHK 出版

バトラー後藤裕子(2015)『英語学習ははやいほどいいのか』岩波書店

アレン玉井光江(2014) 『英語のつまずきは、アルファベットから？ 第 2 回「小文字って結構大変。」』 ARCLE（ベネッセ教育総合研究所）

レフ・セミョノヴィッチ・ヴィゴツキー著 柴田義松訳(2001)『思考と言語』新読書社

Carolyn Graham (1986) *Small Talk: More Jazz Chants*. Oxford University Press.